

チュウリップの幻術

宮沢賢治

青空文庫

この農園のうえんのすもものかきねはいっぱいに青じろい花をつけています。

雲は光つて立派りっぱな玉ぎよくずい髓おきものの置物です。四方の空を繞めぐります。すもものかきねのはずれから一人の洋傘ようがさ直しが荷物にもつをしよつて、この月光をちりばめた緑みどりの障しょう壁へきに沿そつてやつて来ます。てくてくあるいてくるその黒い細い脚あしはたしかに鹿しかに肖にています。そして日が照てつているために荷物の上にかざされた赤白だんだらの小さな洋傘は有平糖あるへいとうでできてるように思われます。

（洋傘直し、洋傘直し、なぜそうちらちらかきねのすきから農園の中をのぞくのか。）

そしててくてくやって来ます。有平糖のその洋傘はいよいよひかり洋傘直しのその顔はいよいよ熱^{ほて}つて笑^{わら}っています。

（洋傘直し、洋傘直し、なぜ農園の入口でおまえはきくつと曲^{まが}るのか。農園の中などにおまえの仕事^{しごと}はあるまいよ。）

ようがさ
洋傘直しは農園^{のうえん}の中へ入ります。しめつた五月の黒つちにチュウリップは無雑作^{むぞうさ}に並^{なら}べて植^うえられ、一めに咲^さき、かすかにかすかにゆらいでいます。

（洋傘直し、洋傘直し。荷物をおろし、おまえは汗^{あせ}を拭^ふいている。そこらに立ってしばらく花を見ようというのか。そうでないならそこらに立っていけないよ。）

えんてい
園丁^{えんてい}がこてをさげて青い上着^{うわぎ}の袖^{そで}で額^{ひたい}の汗^{あせ}を拭^ふきながら向^{むこ}う

の黒い独乙唐檜ドイツとうひの茂みしげの中から出て来ます。

「何のご用ですか。」

「私は洋傘直しですが何かご用はありませんか。若もしまた何か鋏はさみでも研ぐとのがありましたらそちらのほうもいたします。」

「ああそうですか。一寸ちよつとお待ちなさい。主人しゅじんに聞いてあげましょう。」

「どうかお願いねがいたします。」

青い上着の園丁は独乙唐檜の茂みをくぐって消きえて行き、それからぽつと陽ひも消えました。

よつぽど西にその太陽たいようが傾かたむいて、いま入ったばかりの雲の間から沢山たくさんの白い光の棒ぼうを投げなそれは向うの山脈さんみやくのあちこち

に落^おちてさびしい群^{ぐん}青^{しょう}の泣^なき笑^{わら}いをします。

有^{ある}平^{へい}糖^{とう}の洋傘^{ようさん}もいまは普通^{ふつ}の赤^{あか}と白^{しろ}とのキヤラコです。

それから今^{こん}度は風^{ふう}が吹^ふきたちまち太陽^{たいよう}は雲^{くも}を外^はれチュウリップの畑^{はたけ}にも不^ふ意^いに明^ひるく陽^{やう}が射^さしました。まっ赤^かな花^{はな}がぷらぷらゆれて光^{ひかり}つています。

園^{えん}丁^{てい}がいつか俄^{にわ}かにやつて来てガチャツと持^もつて来たものを置^おきました。

「これだけお願^{ねが}いするそうです。」

「へい。ええと。この剪^{せん}定^{てい}鋏^{さみ}はひどく振^ねれておりますから鍛^か

治^じに一^いぺんおかけなさらないと直^{ただ}りません。こちらのほうはみな出来^{でき}ます。はじめにお値^ね段^{だん}を決^きめておいてよろしかったらお研^と

ぎいたしましょう。」

「そうですか。どれだけですか。」

「こちらが八錢^{せん}、こちらが十錢、こちらの鉢^{ちよう}は二丁で十五錢にいたしておきましょう。」

「ようござんす。じゃ願います。水がありますか。持って来てあげましょう。その芝^{しば}の上がいいですか。どこでもあなたのすきな処^{ところ}でおやりなさい。」

「ええ、水は私が持つて参^{まい}ります。」

「そうですか。そこのかきねのこつち側^{がわ}を少し右へついておいでなさい。井戸^{いど}があります。」

「へい。それではお研ぎいたしましょう。」

「ええ。」

園えんてい丁はまた唐檜とうひの中にはいり洋傘直ようがさしは荷物にもつの底そこの道具どうぐのはいった引き出しをあけ缶かんを持って水を取りとに行きます。

そのあとで陽ひがまたふつと消え、風が吹ふき、キヤラコの洋傘はさびしくゆれます。

それから洋傘直しは缶の水をぱちやぱちやこぼしながら戻もどつて来ます。

鋼砥かなどの上で金鋼砂こんごうしゃがじやりじやり云いチュウリップはぷらぷらゆれ、陽がまた降ふって赤い花は光ります。

そこで砥石といしに水が張はられすすと払はらわれ、秋の香魚あゆの腹はらにあるような青い紋もんがもう刃物はものの鋼はがねにあらわれました。

ひばりはいつか空にのぼって行つてチーチクチーチクやり出します。高い処ところで風がどんどん吹きはじめ雲はだんだん融とけていつかすつかり明るくなり、太陽は少しの午睡ごすいのあとのようにどこか青くぼんやりかすんではいますがたしかにかがやく五月のひるすぎをこしら拵こしらえました。

青い上着うわぎの園丁が、唐檜の中から、またいそがしく出て来ます。「お折角せつかくですね、いい天気になりました。もう一つお願いしたいんですがね。」

「何ですか。」

「これですよ。」若い園丁えんていは少し顔を赤くしながら上着のかくしから角柄つのえの西洋剃刀せいようかみそりを取り出します。

洋傘直しはそれを受け取って開いて刃をよく改めます。

「これはどこでお買いになりました。」

「貰ったんですよ。」

「研ぎますか。」

「ええ。」

「それじゃ研いでおきましょう。」

「すぐ来ますからね、じきに三時のやすみです。」園丁は笑って光つてまた唐櫓の中にはいます。

太陽はいまはすっかり午睡のあとの光のもやを払いましたの

で山脈も青くかがやき、さつきまで雲にまぎれてわからな

った雪の死火山もはつきり土耳其玉のそらに浮きあがりました。

洋傘直しは引き出しから合せ砥あわを出しちよつと一寸水をかけ黒い滑なめらかな石でしずかに練ねりはじめます。それからパチツと石をとりま
す。

（おお、洋傘直し、洋傘直し、なぜその石をそんなに眼めの近くまで持もって行いってじつとながめているのだ。石に景色けしきが描かいてあるのか。あの、黒い山がむくむく重かさなり、その向むこうには定めさだめない雲が翔かけ、溪たにの水は風より軽かるく幾いくほん本ほんの木は険けわしい崖がけからからだを曲まげて空に向むかう、あの景色が石の滑らかな面めんに描えいてあるのか。）

洋傘直しは石を置おき剃かみそり刀を取ります。剃刀は青ぞらをうつせば青くぎらつと光ります。

それは音なく砥といし石をすべり陽ひの光が強ひいので洋傘直しはポタポ

夕汗^{あせ}を落^{おと}します。今は全^まく五月のまひるです。

煙^{はたけ}の黒土はわずかに息^{いき}をはき風^{ふう}が吹^ふいて花は強くゆれ、唐檜も動きます。

洋傘直しは剃刀をていねいに調^{しら}べそれから茶いろの粗^{あら}布^{ぬの}の上
にできあがった仕^し事^{ごと}をみんな載^のせほつと息して立ちあがります。

そして一足チュウリップの方に近づきます。

園丁が顔をまっ赤^かにほてらして飛^とんで来ました。

「もう出来たんですか。」

「ええ。」

「それでは代^{だい}を持^もつて来ました。そつちは三十三銭^{せん}ですね。お取^と
り下さい。それから私の分はいくらですか。」

洋傘直しは帽子をとり銀貨と銅貨とを受け取ります。

「ありがとうございます。剃刀のほうは要りません。」

「どうしてですか。」

「お負けいたしておきましょう。」

「まあ取って下さい。」

「いいえ、いただくほどじゃありません。」

「そうですか。ありがとうございました。そんなら一寸向うの番小屋までおいで下さい。お茶でもさしあげましょう。」

「いいえ、もう失礼いたします。」

「それではあんまりです。一寸お待ち下さい。ええと、仕方ない、そんならまあ私の作った花でも見て行つて下さい。」

「ええ、ありがとう。拝見^{はいけん}しましょう。」

「そうですか。では。」

その気^き紛^{まぐ}れの洋傘直しと園^{えん}丁^{てい}とはうつこんこの畑^{はたけ}の方へ五、六歩^よ寄ります。

主人らしい人の縞^{しま}のシャツが唐櫓^{とうりょ}の向うでチラツとします。園丁はそつちを見かすかに笑い何か云^いいかけようとします。

けれどもシャツは見えなくなり、園丁は花を指^{ゆび}さします。

「ね、此^この黄^{だい}と橙^{だい}の大きな斑^{ぶち}はアメリカから直^じかに取^とりました。こちらの黄いろは見ていると額^{ひたい}が痛^{いた}くなるでしょう。」

「ええ。」

「この赤と白の斑^{ぶち}は私はいつでも昔^{むかし}の海賊^{かいぞく}のチョッキのような

気がするんですよ。ね。

それからこれはまつ赤な羽二重はぶたえのコップでしょう。この花びらは半ぶんすきとおっているので大へん有名ゆうめいです。ですからこいつの球きゅうはずいぶんみんなで欲ほしがります。」

「ええ、全く立派まつたりつぱです。赤い花は風で動うごいている時よりもじっとしている時のほうがいいようですね。」

「そうです。そうです。そして一寸ちよつとあいつをごらんなさい。ね。そら、その黄いろの隣となりのあいつです。」

「あの小さな白いのですか。」

「そうです、あれは此処ここでは一番大切なのです。まあしばらくじっと見詰みつめてごらんなさい。どうです、形のいいことは一いっ等とうで

しよう。」

洋傘ようがさ直しはしばらくその花に見入ります。そしてだまってしまっています。

「ずいぶん寂しずかな緑の柄みどりでしょう。風にゆらいで微かすかに光っているようです。いかにもその柄が風に韌しなっているようです。けれども実は少しも動いておりません。それにあの白い小さな花は何か不思議な合図ふしぎを空に送おくっているようにあなたには思われませんか。」

洋傘直しはいきなり高く叫さけびます。

「ああ、そうです、そうです、見えました。

けれども何だか空のひばりの羽の動かしようが、いや鳴きよう

が、さつきと調子^{ちようし}をちがえてきたではありませんか。」

「そうでしょうとも、それですから、ごらんなさい。あの花の盃^{さかずき}の中からぎらぎら光つてすきとおる蒸気^{じようき}が丁度^{ちようど}水へ砂糖^{さとう}を溶^としたときのようにユラユラユラ空へ昇^{のぼ}って行くでしょう。」

「ええ、ええ、そうです。」

「そして、そら、光が湧^わいているでしょう。おお、湧きあがる、

湧きあがる、花の盃^{さかずき}をあふれてひろがり湧きあがりひろがりひろ

がりもう青ぞらも光の波^{なみ}で一ぱいです。山脈^{さんみやく}の雪も光の中で

機嫌^{きげん}よく空へ笑^{わら}っています。湧きます、湧きます。ふう、チュウ

リップの光の酒^{さけ}。どうです。チュウリップの光の酒。ほめて下さ

い。」

「ええ、このエステルは上等じょうとうです。とても合成ごうせいできません。
」

「おや、エステルだって、合成だって、そいつは素敵すてきだ。あなたはどこの化学かがく大学を出た方ですね。」

「いいえ、私はエステル工学校の卒業そつぎようせい生です。」

「エステル工学校。ハツハツハ。素敵だ。さあどうです。一杯いっぱい

やりましょう。チュウリップの光の酒。さあ飲のみませんか。」

「いや、やりましょう。よう、あなたの健康けんこうを祝しゅくします。」

「よう、ご健康を祝します。いい酒です。貧乏びんぼうな僕ぼくのお酒はま

た一層いっそうに光っておまけに軽かるいのだ。」

「けれどもぜんたいこれでいいんですか。あんまり光が過すぎはし

ませんか。」

「いいえ心配しんぱいありません。酒があんなに湧きあがり波を立てたり渦うずになったり花卉かべんをあふれて流ながれてもあのチュウリップの緑みどりの花柄かへいは一寸ちよつともゆらぎはしないのです。さあも一つおやりなさい。」

「ええ、ありがとう。あなたもそうです。奇麗きれいな空じやありませんか。」

「やりますとも、おつと沢山たくさん沢山。けれどもいくらこぼれたところでそこら一面いちめんチュウリップ酒しゅの波だもの。」

「一面どころじゃありません。そらのはずれから地面じめんの底そこまですつかり光の領分りょうぶんです。たしかに今は光のお酒が地面の腹はらの底そこ

までしました。」

「ええ、ええ、そうです。おや、ごらんなさい、向うの畑^{むこうはたけ}ね。光の酒に漬^{つか}つては花椰菜^{はなやしがい}でもアスパラガスでも実に立派^{じつぱり}なものではありませんか。」

「立派ですね。チュウリップ酒で漬^{つか}けた瓶詰^{びんづめ}です。しかし一体ひばりはどこまで逃^にげたでしょう。どこまで逃げて行つたのかしら。自分で斯^こんな光の波^{なみ}を起^{おこ}しておいてあとはどこかへ逃げるとは氣取^{きど}つてやがる。あんまり氣取^{きど}つてやがる、畜生^{ちくしょう}。」

「まったくそうです。こら、ひばりめ、降^おりて来い。ははあ、やつ、溶^とけたな。こんなに雲もない空にかくれるなんてできないはずだ。溶けたのですよ。」

「いいえ、あいつの歌なら、あの甘^{あま}ったるい歌なら、さつきから光の中に溶けていましたがひばりはまさか溶けますまい。溶けたとしたらその小さな骨^{ほね}を何かの網^{あみ}で掬^{すく}い上げなくちやなりません。そいつはあんまり手数です。」

「まあそうですね。しかしひばりのことなどはまあどうなろうと構^{かま}わないではありませんか。全^{ぜん}体^{たい}ひばりというものは小さなもので、空をチークチーク飛^とぶだけのもんです。」

「まあ、そうですね、それでいいでしょう。ところが、おやおや、あんなでもやっぱいいんですか。向^{むか}うの唐櫓^{とうりょ}が何だかゆれて踊^{おど}り出^ですらしいですよ。」

「唐櫓ですか。あいつはみんな、一^{いっしやうたい}小隊^{せうたい}はありましよう。」

みんな若いしわか擲弾兵グレナデアーです。」

「ゆれて踊っているようですが構いませんか。」

「なあに心配しんぱいありません。どうせチュウリップ酒しゅの中の景色けしきです。いくら跳ねてもいいじゃありませんか。」

「そいつは全くまったそうですね。まあ大目に見ておきましょう。」

「大目に見ないといけません。いい酒だ。ふう。」

「すももも踊り出しますよ。」

「すももは牆壁しょうへき仕立じたちてです。ダイアモンドです。枝えだがななめに交叉こうさします。一中隊はありますよ。義勇中隊ぎゆうです。」

「やっぱりあんなでいいんですか。」

「構かまいませんよ。それよりまああの梨なしの木どもをご覧らんなさい。枝えだ

が剪^きられたばかりなので身体^{からだ}が一向^{いつこう}釣り合^あいません。まるで蛹^{さなぎ}の踊^{おど}りです。」

「蛹^{さなぎ}踊^{おどり}とはそいつはあんまり可^{かわい}哀^{あい}そうです。すっかり悄^{しよげ}気^けで化石^{かせき}してしまったようじゃありませんか。」

「石になるとは。そいつはあんまりひどすぎる。おい。梨の木。木のまんまでいいんだよ。けれども仲^{なか}々^{なか}人の命^{めい}令^{れい}をすなおに用^{もち}いるやつらじゃないんです。」

「それより向^{むこ}うのくだものの木の踊^{おど}りの環^わをごろんなさい。まん中に居^いてきやんきやん調^{ちようし}子^しをとるのがあれが桜桃^{おうとう}の木ですか。」

「どれですか。あああれですか。いいえ、あいつは油^{つばい}桃^{もも}です。」

やつぱり巴丹杏^{はたんきよう}やまるめろの歌は上手^{じようず}です。どうです。行つ

て仲間^{なかも}にはいりましょうか。行きましょう。」

「行きましょう。おい。おいとも仲間に入れろ。痛い、畜^{ちくしよ}

生^う。」

「どうかなさったのですか。」

「眼^めをやられました。どいつかにひどく引つ搔^かかれたのです。」

「そうでしょう。全体^{ぜんたい}駄目^{だめ}です。どいつも満^{まん}足^{ぞく}の手のあるや

つはありません。みんなガリガリ骨^{ほね}ばかり、おや、いけない、い

けない、すっかり崩^{くず}れて泣^ないたりわめいたりむしりあつたりなく

つたり一体^{いったい}あんまり冗^{じようだん}談^{だん}が過^すぎたのです。」

「ええ、斯^こう世^よの中^{なか}が乱^{みだ}れては全^まくど^うも仕^{しか}方^たありません。」

「全くそうです。そうら。そら、火です、火です。火がつかしました。チュウリップ酒に火がはいったのです。」

「いけない、いけない。はたけも空もみんなけむり、しろけむり。」

「パチパチパチパチやっている。」

「どうも素敵に強い酒だと思いましたよ。」

「そうそう、だからこれはあの白いチュウリップでしょう。」

「そうですね。」

「そうです。そうですとも。ここで一番大事な花です。」

「ああ、もうよほど経ったでしょう。チュウリップの幻術にかかっているうちに。もう私は行かなければなりません。さよう

なら。」

「そうですか、ではさようなら。」

洋傘^{ようがさ}直しは荷物^{にもつ}へよろよろ歩いて行き、有平糖^{あるへいとう}の広告^{こうこく}つ

きのその荷物を肩^{かた}にし、もう一度^{いちど}あのあやしい花をちらつと見て

それからすももの垣根^{かきね}の入口にまっすぐに歩いて行きます。

園丁^{えんてい}は何だか顔が青ざめてしばらくそれを見送り^{みおく}やがて唐檜^{とうひ}

の中へはいります。

太陽^{たいよう}はいつかまた雲の間にはいり太い白い光の棒^{ぼう}の幾条^{いくすじ}を

山と野原とに落^{おと}します。

青空文庫情報

底本：「インドラの網」角川文庫、角川書店

1996（平成8）年4月25日初版発行

1996（平成8）年6月20日再版発行

底本の親本：「【新】校本宮澤賢治全集 第九巻 童話2」#

「2」はローマ数字、1-13-22] 本文篇] 筑摩書房

1995（平成7）年6月

入力：土屋隆

校正：川山隆

2008年5月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

チュウリップの幻術

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>